

実践女子大学図書館蔵 下田歌子自筆日記について(五)

明治二十四年後半の概要

愛甲 晴美

はじめに

本稿は、実践女子大学図書館所蔵の下田歌子自筆日記についての調査報告である。今回は明治二十四年（下田歌子関係資料 出納番号三三 以下下田資料）一月から十二月のうち七月から十二月までを取り上げる。当該期間の概要を一覧で示し、主要な出来事についての解説を加える。日記の状態は前回の調査報告で示したとおりである。²⁾

明治二十四年後半で特筆すべき事柄として、十月二十八日に発生した濃尾震災が挙げられる。震災に対する下田歌子（以下下田）および華族女学校の行動を日記等から探ることとする。

なお、以下文中引用文、参考文献等については、読み易さを考慮し、筆者の判断で一部旧字体を新字体に直して表記した。

1. 明治二十四年七月から十二月の概要

下田の日記の記述をもとに、明治二十四年七月から十二月の動向を一覧にした。

日記には記載がないが下田に関係している事項、および補足説明は（ ）で示した。

月	日	主要事項
七	一	五日頃まで体調不良が続く（六月二十八日に腸胃かたる発症）が、校務多忙のため押して出校
	十	品川（弥二郎内務）大臣を訪う
	十一	芝離宮に皇后のご機嫌伺いに行く
	十八	（華族）女学校卒業証書授与式

月	日	主要事項
	十九	大方の塾生が帰省する
	二十三	鈴木氏来訪、仏語稽古する
	二十九	前田氏へ（仏語）稽古に行く
八	一	宮様、大臣等へ暑中（見舞い）に行き、竹添氏へ立ち寄り、婚姻の仕度など見繕う
	七	（竹添）すま子の婚儀に参列する
	十一	十一〜十七日記載なし
九	九	高野へ、体操の（為か？）下見分に行く
	十七	夜旧暦の望月を賞して、塾生と歌会を催す
十	二	体調不良で平臥（五日頃まで不調が続く）
	六	高崎男の結婚の喜びに行く
	十	常宮（昌子内親王）（高輪御殿）で琵琶の催し、晚餐を賜う
	十四	自宅講義 三島氏（邸）へ婚姻礼式の事で行く
	十六	三島氏（邸）で一泊する
	十七	神嘗祭
	十九	本日より体格試験（二十九日まで）
	二十三	近衛（篤麿）夫人、佐野（安）母御を弔う
	二十四	（堀江）よし子と勸工場に行き、十一月一日の父（録蔵）の誕生日に塾生に出す福引（の品）を買いに行く
	二十五	三島彌太郎氏帰京につき、夜三島邸を訪問

月	日	主要事項
	二十八	（濃尾震災発生）
	二十九	前日の地震で美濃、尾張大変のよし、しるべの人へ書状を出す
	三十一	午後より、塾生と団子坂の菊見に行く
	十一	父の誕生日を祝い、塾生へ福引を出す
	三	天長節 祝宴を開く
	八	赤十字社へ秋月氏の見舞いに行くが既に退院 塾にて岐阜震災地へ義捐すべきはうたい（綱帯）を一日より作る
	十二	塾生と震災慈善会へ行く
	十三	第六週開校記念式を挙げる
	十六	高野宅へ、体操の事で訪問、夜塾生たちと、川島へ各種の織物を見に行く
	十七	皇后の御供で吹上（御所）の御菊観に行く
	二十三	新嘗祭休校
	二十六	夜、サラザン氏のソワレーに行く
	十二	従五位に叙せられる。夜塾生と叙（勲）の祝いをする
	十二	夕六時過ぎ、枢密院官舎焼失
	十七	閑院宮へ（御祝）に行く
	十八	多忙のため年末まで日記を廃す（以降記載なし）

六月二十八日の記述に「腸胃かたるにて吐瀉」とあり、七月に入っても体調不良が続いた。一日からは校務が多忙なため、出校

しているものの、五日まで「平臥」の文字が見られる。五日、九日には三島(通良)医師が来診している。³⁾

十三日、十四日は入学試験が行われた。

十八日は華族女学校卒業証書授与式が執り行われた。学校は夏季休業に入り、翌十九日には、塾生のほとんどが帰省したとあるが、七名の塾生はそのまま残っている。下田は夏季休業中も出校し学務に追われる様子がうかがえる。

八月一日は「所々宮様、大臣等へ暑中にゆき、竹添氏へ立より、婚姻の仕度などみつくろひて」とある。暑中見舞いに回った後立ち寄っている竹添氏は、華族女学校生徒の竹添須磨子の自宅であろう。竹添須磨子は下田が明治十五年に創設した桃天学校(下田学校から改名)からの教え子であり、肥後国(熊本県)出身の外交官、漢学者であった竹添進一郎の次女である。下田の古い教え子の中でも、後年下田死去の際、護国寺の墓所の遺骨の周囲に配された十二神将の陶像を、同じく教え子で同級生であった近衛貞子とともに寄進するほど、下田への敬慕を持ち続けた人物である。須磨子は、講道館柔道の創始者で日本のオリンピック初参加やオリンピック招致にも貢献したことで知られる、嘉納治五郎と結婚する。一日の記述はその婚礼のための仕度であった。

嘉納治五郎は万延元年生まれで、摂津国御影の酒造・廻船を手掛けた名家の出身であり、下田の弟鑑蔵と同年であった。下田資料は、明治二十四年七月八日付の下田歌子宛嘉納治五郎書簡を所蔵する(下田資料 二〇四七)。

書簡には、「兼而御配慮願上候一条 木下御夫婦に頼む事に決し 既に承諾も得候間御安神願上度候」とあり、この一条とは媒酌人に関する事で、下田が心をくだいていた様子がわかる。木下夫妻とは、竹添進一郎が師事した熊本藩の漢学者木下犀潭の次男、木下広次第一高等中学校長(後に京都帝国大学総長)夫妻のことで、両家と親交が深かった。嘉納は明治二十四年一月に欧州諸国歴訪から帰国し、しばらく次姉柳勝子の家に寄寓していた。書簡では結納が七月九日に決まったことを知らせ、婚儀に出席してほしいと依頼している。

日記で結婚に関する記述は、明治二十四年六月九日、二十一日に「縁談」とあり、その後も竹添氏、同夫人、須磨子、嘉納治五郎と行き来して相談に応じている様子がうかがわれる。

八月七日の記述には「午後二時過より竹添氏へゆき、か納氏へゆきて、すま子の婚儀に列す」とある。婚儀は柳家で行われた。

結婚後まもなく、嘉納は第五高等中学校長に任じられ熊本へ単身赴任となるが、須磨子はそのまま東京にとどまり、華族女学校に通学を続け、⁴⁾明治二十五年に卒業している。⁵⁾

八月十日に「来客等にて日記を廃す」とあり、同十七日までは記載がない。

八月下旬からは、九月の新学期に向けて帰塾する塾生を書きとめている。

十月十四日は出校し、午後二時帰宅し、自宅で講義した後、午後五時に「婚姻礼式の事にて」三島(故通庸)宅を訪れた。明治

二十一年十月二十三日に死去した警視總監三島通庸は、娘たちを華族女学校に入学させており深い親交があつた。実際の執筆者は物集高見とされているが、三島の著書として出版された『国のすがた』の出版・普及に熱意を示し、奔走したのは下田で、出版名義人が下田の弟平尾錡蔵であることも、下田との関わりの深さをあらわしている一例といえよう。

三島の死後も夫人、娘、息子たちとは親密な関わりがあつたことが、三島家の人々との書簡のやり取りや、訪問来訪の頻繁さだけでなく、三島の大磯別邸への宿泊、憲法発布式出席にあたって和歌子夫人の服を借用するなど個々の事例からもうかがえる。

十四日の婚姻礼式は長女園子の結婚に関することで、園子は明治二十二年卒業後、同二十三、四年は専修科に在籍している。外交官となる秋月左都夫と結婚するが、秋月は結婚に関して、下田にたびたび書簡を送つて相談している（下田資料 二〇四八〜二〇五二）。

この縁談は三島通庸の次女峰子の夫で秋月の友人であつた、牧野伸顕からもたらされた。

その間の事情は『秋月左都夫 その生涯と文藻』に詳しい。「秋月の人物に惚れた牧野が、自分の友人で、ベルギーに在つて秋月の友人でもある、松方正作（松方正義の三男）に渡りをつけて、松方から秋月に義姉を推挙させた」とのことである。秋月は高鍋藩家老秋月種節の三男で、司法省法学校を卒業し司法省に入庁、その後外務省に移り、ベルギーに官費留学していた。前掲書に、

明治二十三年一月二十九日付の松方から牧野へ宛てた書簡が紹介されている。秋月が三島家に対して、結婚に際しての条件や自身の身上を松方に伝えたこの内容が要因となり、縁談が長引いたようである。明治二十四年八月以降の下田への書簡には、松方への書簡の内容に呼応する形で、秋月の伝えた条件などに対して周囲の関係者から問いただされている窮状を事細かく下田に書き送っている。縁談を進めるにあつては、下田が、懇意であつた三島和歌子夫人との交渉役を依頼されていたことが、秋月の書簡から読み取れる。下田への信頼も厚く、先行きの判断を任せるといった内容も記されている。

日記の九月二日に下田が秋月を訪問したとあり、秋月の翌三日の書簡から、縁談が下田の尽力でまとまつたことに感謝を述べている。この書簡から、秋月が郷里の母（義母）、兄に上京するよう電信を送り、遅くとも十月十日頃までには上京できるので、十月二十三日に死去した三島通庸の法要の前に婚儀を行いたいという三島家の意向に沿えるであろうとも伝えている。しかし、秋月の母は上京後ほどなく発病し、十一月六日に亡くなるという不幸に見舞われた。後述する十一月八日、十四日の日記も、秋月への見舞い、弔問の記述が見られ、書簡の内容と合致する。

そのようなやむを得ない事情により、婚儀は同年十二月三十日に執り行われた。三十日であつたことは、婚儀に出席する旨を伝えた下田と堀江義子連名の前日二十九日付の書簡によつて裏付けられる。

竹添須磨子、三島園子に対する対応は、縁談をまとめる世話役として細やかな心遣いがなされていることが、書簡などから知れる。この例に洩れず、教え子や保護者の様々な相談に応じ、特に教え子たちの人生においての節目である結婚、出産から葬儀に至るまで、その都度心をくだいていた様子を日記からうかがい知ることが出来る。こうした下田の面倒見のよさが、後々まで多くの教え子に慕われ続けた要因でもあろう。

十月二十日、近衛篤磨夫人衍子が死去した。衍子は旧加賀藩主前田慶寧の五女で、歌子は同二十三日に夫人を弔いに行っている。息子の文麿出産から一週間あまりでの死去であった。その後衍子の妹貞子が後妻となり、文麿を養育した。前述の嘉納須磨子とともに、下田の墓所に十二神将陶像を供えたのがこの貞子である。

同二十四日は学校退出後、父録蔵の誕生日祝いの際の福引に使う景品を買うため、堀江よし子と勧工場へ行った。勧工場は今でいうところのデパートである。福引の品がどのようなものだったかは不明だが、日記には、「これは余が見立ざれば、父君の満足し給はざればなり」とわざわざ書き残している。父が喜ぶよう心をくだく娘の配慮が見られる。

同二十八日早朝、岐阜県本巣郡西根尾村を震源とする大地震が発生した。濃尾(大)震災とも呼ばれる、日本史上でも最大規模の直下型地震であった。この震災については後述する。

同三十一日は午後塾生と「団子坂の菊見」に行っている。明治二十二年の日記にも塾生を連れて団子坂の菊人形館に行ったとあ

る。団子坂の菊人形は大変人気を博した秋の風物詩で、文化年間頃、染井・巣鴨などに始まる菊細工の流行から始まり、明治初期にその中心が団子坂(文京区千駄木二・三丁目間)へと移る。明治九年から木戸銭をとる正式な興行となり、明治二十年から三十年代が黄金期であった。興行は明治四十四年まで続いた。

十一月一日は父録蔵の誕生日(壬申戸籍は十一月一日、平尾家過去帳には四月とある)で、夜誕生日を祝って、塾生に福引を出した。現存する日記で録蔵の誕生日に触れているのは、この明治二十四年のみである。

同十三日は第六週開校記念式が執り行われた。

同十六日夜、塾生を連れて「川寫へ各種の織物見にゆく」とある。天保十四年(一八四三)創業で京都西陣織の老舗として知られる川島織物は、明治二十四年二月に京橋鎗屋町(現在の銀座四丁目付近)に「上田屋帯地店」の名で出店していたことを、川島織物文化館館長辻本憲志氏よりご教示いただいた。明治三十九年の電話番号簿には「上田屋 織物店 京橋、槍屋一五」とあり、大正六年の職業別電話名簿には同住所で前述の店名に続いて川島織物当主「川島甚兵衛」の名が見える。電話帳記載の織物店には、ほかに該当する店が見当たらず、日記の「川寫」は川島織物のことと推測され、塾生と訪れたのはこの店ではないかと思われる。同十七日には皇后にお供して吹上御所の菊見をしている。十二月八日、下田は従五位に叙せられた。夜、塾生とともに叙勲を祝ったとある。

同十二日、枢密院官舎で火災が発生した。官報によれば、午後七時四十分に麹町区永田町一丁目二番地の枢密院官舎より出火し、一棟が半焼した。原因は二階を修繕して焚火で天井を乾かしていた残り火によるものであった。¹⁰『明治天皇紀』の同日の記録にも、「枢密院議長事務所過まちて火を失す、會議筆記其の他書類多く焼失す」と記される。¹¹下田の住む華族女学校官舎は永田町一丁目六番地で、火災現場はすぐ近くである。¹²日記には、「枢密院官舎焼失、宮内省及び宮様方其他各所より御見まひ来る」とあり、あわただしさが感じられる。

同十七日「閑院宮へ御祝に行く」と記されている。閑院宮載仁親王と三条実美の次女智恵子の結婚は十九日で、¹³その御祝であろう。

同十八日を最後に以降日記の記述はない。「非常に多忙なれば」と理由も記されている。

2. 濃尾震災への下田および華族女学校の対応

十月二十八日の地震の被害は甚大で、美濃・尾張地域での被害は死者約七千人、負傷者約一万七千人、家屋全壊約十三万八千棟にも及んだ。朝食の時間帯でもあったため、火災も多く発生している。¹⁴現在の岐阜県・愛知県・福井県を中心として地震は広範囲に波及し、近隣各地にも被害が拡大した。同日東京でも地震が観測されたことが『東京市史稿』で確認できる。¹⁵

下田は地震の翌日二十九日の日記に地震の事を記し、知人へ書状を送っている。震災当時の岐阜県知事は小崎利準で、娘は華族女学校の教え子である。また、福井県知事は牧野伸顕であった。被災地には多くの知人がいたと思われる。

次に、日記に見られる地震に関連する記述の原文を抜粋し、翻字を付す。

凡例

- 一 旧字体は新字体に改めて表記した。
- 一 句読点はできる限り原文通り表記した。
- 一 翻字は山口典子氏による翻字原稿を参照し、筆者が作成した。

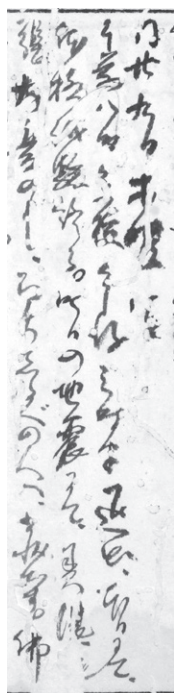


図1 本文第四十七丁裏

同(十月)筆者注)廿九日 木曜 晴
午前八時参校 午後三時半退出、本日にて、
体格試験終る。昨日の地震にて、美濃尾
張大変のよし、即ちしるべの人へ、書状だす。仏

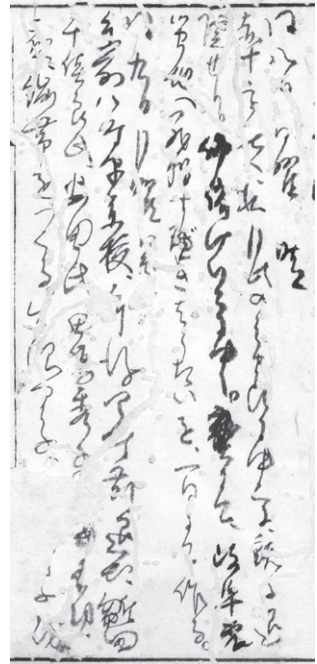


図2 本文第四十九丁表

同(十一月以下同じ)筆者注 八日 日曜 晴
赤十字社へ、秋月氏のみまひにゆくに、既に退
院せり。仏語けいこにゆく。塾にて、岐阜震
災地へ義捐すべきはうたいを、一同にて作る。

同九日 月曜 曇

午前八時半参校、午後四時前退出、雛田

千佳良氏、安田氏 田島秀子□□来訪、

夜繙帯をつくる。生沼里子□□

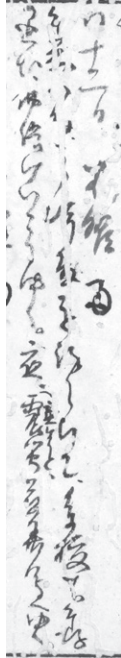


図3 本文第四十九丁裏

同十二日 木曜 雨

午前八時高崎殿を訪らひて、参校す。午後

退出、仏語けいこにゆく。夜、塾生と、震災慈善会へゆく

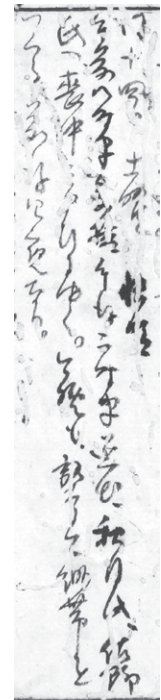


図4 本文第五十丁表

同十四日 土曜 快晴
午前八時半参校 午後二時半退出、秋月氏、佐野
氏へ喪中¹⁷まひにゆく。今晚も、塾にて繙帯を
つくる。前後四夜なり。

十一月十二日の震災慈善会は、鹿鳴館で開かれた東京慈恵医院
婦人慈善会のことである。

婦人慈善会は、「当初大山、伊藤、井上の三令婦人及山川、北
島、津田の三令嬢の発起に出て有志共立東京病院の婦嬰患者
療薬の資を寄贈せんとするを以て目的とせり」と伝えられ、
一八八六年皇后が総裁となつた。翌年、有志共立東京病院は東京
慈恵医院に改称された。

この慈善会での皇后の行啓で、「乃ち会場に臨御して各種陳列
品を御覧の上、総額金千二百円の諸品を御買上あり、正午還御し
たまふ。尚同慈善会収益金は例年同院施療費の補助に充当せられ
しが、今回は皇后特に御沙汰を下して之を愛知・岐阜両県下震災
罹災民救助の費に充てしめたまひ、且つ金千円を同会に賜ひて同
救助費に加へしめらる。」と被災地の救助のために収益を充てる
よう要請した。¹⁷

天皇、皇后はこの震災に心を痛め、被害の実態報告を被災県知事に直接報告させ、たびたび義捐金を下賜している。

また、「華族女学校、東京女学館、東京府高等女学校、明治女学校、同志社男女学校などからも義捐が相次いだ」¹⁸とことが、特に明治女学校の震災救援については、『明治女学校の研究』によれば、同校教頭職にあつた巖本善治の「濃尾震災救援の執拗な関心には、大須賀（石井）亮一の行動に対する関心と協力」という点が大きかった。¹⁹

大須賀（のちに石井）亮一はキリスト教信者で、この震災によって多くの孤児が路頭に迷い、特に少女が悲惨な境遇となつているのを目の当たりにして、孤女たちを収容する孤女学院を作つた。その中に知的障害をもつ少女が含まれていたことから、知的障害児者の福祉・教育のための施設を作る必要性を痛感し、渡米して学び、帰国後、華族女学校で教鞭をとつていた小鹿島筆子（のちに石井）とともに知的障害児者の教育・福祉施設の草分けである滝乃川学園を設立運営し、福祉・教育に生涯を捧げた人物である。

巖本が主宰した「女学雑誌」における濃尾震災関連記事は大変多く、救援活動についても掲載されている。²⁰

華族女学校の記録によれば、「此ノ日（十一月十三日）開校紀念式（筆者注）例ニ依テ生徒へ茶菓ヲ給ス偶愛知岐阜縣下震災ノ惨状ヲ見聞セルヲ以テ各自之ヲ其罹災者ニ贈ラントシ手續ヲ校長ニ請フ校長其特志ヲ聽許シ即時之ヲ愛岐両縣ノ知事ニ協議シ其配與ヲ依頼セリ」²¹と記される。この茶菓は「麴麩約五百斤」とあるが、

どのようなものだったのであろうか。²²生徒たちの希望で、第六週開校記念式で配られたこの麴麩を震災地の罹災した児童へ送つたという。

日記からは、自宅で塾生とともに下田自らも繻帯を作つていた様子がうかがえる。この繻帯作りは、明治二十四年十一月十六日付 読売新聞でも報じている。（記事のフリガナは省略した）。

深窓亦災民の苦を憐れむ 麴町區永田町一丁目

の華族女学校學監下田歌子氏の私塾生三條、松方、土

方、三島、岩村、野村、西郷の令嬢等及び舊塾生七十餘

名申合せて震災地の患者を救はんとて繻帯數百卷を

製して此程上京の縣知事に托して寄送したりと

記事によれば、現在の塾生のみならず、もとの塾生であつた教え子たちも協力して繻帯作りを行い、その数は數百本にも及んだ。

同年五月十一日に発生した大津事件においても、西村茂樹華族女学校長が慰問に出立するにあたり、華族女学校生徒の制作品をひぎ掛けやクッションに整え、その出来栄が新聞で取り上げられるほどのものを用意するなど、対応の早さは目を見張るものがある。²³

多忙な日課の合間を縫つて、率先して被災者支援を行おうとする姿は、その後の関東大震災において、愛国婦人会会長として、

また、実践女学校長として救援活動を指揮した実績が、下田の判断力と行動力によるものであることを裏付ける証拠といえよう。

3. 仏語(フランス語)の学習について

明治二十一年十一月六日の記述以降、²⁴下田および堀江よし子が仏語の教授を継続して受けていたことが明らかとなっている。日記にはたびたび「仏語稽古(けいこ)」の記載が見られるが、明治二十四年の前半には十回に満たないのに比して、七月以降は七十回を超える。堀江よし子も常に一緒であったかは判然としないが、堀江の病気を理由に「仏語けいこを廃す」と記されていることから、おそらく共に学んでいたのではないかと思われる。また、教えている人物も明治二十一年の記述にあるサラザンだけではなく、鈴木、前田と複数の名が記されている。フランス語が公用語として重視されていたことから、その習得に努力していたとも考えられるが、下田がこれほどまでに集中してフランス語を学んでいたことには、明確な理由があったのではないかと推測される。下田は明治二十六年九月に、堀江義子(渡航の際の旅券の記載)とともに女子教育視察のために渡欧するが、堀江はフランスで学び、下田はイギリスを拠点とした。下田が英語習得に苦労したことは、欧米滞在中の所感を綴った「外の漬づと」などからうかがえる。渡欧前の時点で、英語習得の機会は得られなかったのだろうか。

現在確認できる自筆日記は明治二十一年十月から同二十四年十二月であり、渡欧までの詳細な事情を知り得ないが、今後解明していきたい点である。

おわりに

多大な被害をもたらした濃尾震災をきっかけとして、震災予防への関心と研究が進んだ。写真技術の発達もあり、震災の記録やデータも残され、その後の地震研究、災害対策にも貴重な資料となっている。天皇・皇后による災害救援のための下賜に加え、民間においても救援・救護活動のほか、前述の大須賀亮一の孤女学院のように震災孤児を収容する福祉施設が開設されることにもつながり、社会福祉活動は広がりを見せている。

震災直後の下田の繙帯作りも、慈善会への寄付も、震災救援という社会福祉活動において、まず自ら率先してできることを行っていく態度を教えた子たちに身を以て示している。その後の関東大震災での目覚ましい救援活躍も、こうした下田の行動力によるものであろう。

また、竹添須磨子、三島園子への親身な対応からは、後年下田が、教え子たちは自分の教えの娘であると語った、その親心ともいえる温かい心根を感じさせる。

下田の膝下で学んだ生徒たちが、終生下田を敬慕し続けた理由の一端を、ここに垣間見ることができたように感じる。

現在確認できる下田の自筆日記は三年三か月ほどで、その八十二年の生涯においては僅かな期間である。平成二十六年度から開始した調査においては、それさえも、詳細を明らかにするには程遠く、微かな足跡をたどるのみであった。その中でも、関係諸氏並びに関係機関より多大なるご教示とご協力をいただき、今まで知られていなかった下田の一面を見出すことができたのではないかと考える。ここに改めて感謝申し上げる。今後も調査の過程で追うことが叶わなかった交友関係や出来事も含め、下田の人物像の一端に触れられるよう調査研究を続けていきたい。

注

- 1 正式名称は実践女子大学・実践女子大学短期大学部図書館
拙稿「実践女子大学図書館蔵 下田歌子自筆日記について(四) 明治二十四年前半の概要」 下田歌子研究所年報『女性と文化』第四号 二〇一八年
- 2 同注2
- 3 『嘉納治五郎』嘉納先生伝記編纂会編 講道館 一九六四年 一六一七頁
- 4 『卒業修了及修業者並入園者名簿』『女子学習院五十年史』女子学習院 一九三五年 八十頁 明治二十五年七月卒業の項に「竹添須磨」とある。
- 5 黒木勇吉編著『秋月左都夫 その生涯と文藻』講談社 一九七二年
- 6 『菊人形今昔 団子坂に花開いた秋の風物詩』文京ふるさと歴史館 文京区教育委員会 二〇〇二年
- 7 『明治三十九年四月改 電話番号簿』東京郵便局 一九〇六年、『東

- 9 京職業別電話名簿 大正六年用『弘益社 一九一七年官報 明治二十四年十二月九日
- 10 官報 明治二十四年十二月十四日
- 11 『明治天皇紀』第七 宮内庁 吉川弘文館 一九七二年
- 12 拙稿「実践女子大学図書館蔵 下田歌子自筆日記について(二) 明治二十二年の概要」 下田歌子研究所年報『女性と文化』第二号 二〇一六年 一〇八頁地図参照
- 13 佐藤元英監修・解説『閑院宮載仁親王・閑院宮春仁王』上 皇族軍人伝記集成 第九巻 ゆまに書房 二〇一二年 五〇頁
- 14 村松郁栄『濃尾震災——明治二十四年内陸最大の地震』シリーズ日本の歴史災害 第三巻 古今書院 二〇〇六年 二四頁の被書統計一覧表より筆者が概算した
- 15 『東京市史稿 變災篇』第一 東京市役所 一九一四年
- 16 井桁碧編著『日本』国家と女』青弓社 二〇〇〇年 六四―六五頁
- 17 『昭憲皇太后実録』上巻 宮内庁 二〇一四年 五八〇頁
- 18 同注16 七八頁
- 19 青山なを『明治女学校の研究』慶応通信 一九七〇年 六二―九頁
- 20 同注19 六二―九頁
- 21 『華族女学校第七年報 自明治二十四年九月 至明治二十五年八月』華族女学校
- 22 同注5 年表
- 23 同注2
- 24 拙稿「実践女子大学図書館蔵 下田歌子自筆日記について(一) 書誌および明治二十一年の概要」 下田歌子研究所年報『女性と文化』第一号 二〇一五年

(あいこつ・はるみ／下田歌子記念女性総合研究所 客員研究員)

Findings from Utako Shimoda's Handwritten Diaries Property of
the Jissen Women's University Library (5)
— Summary of Material late in 1891 —

AIKO Harumi

This is the fifth part of the survey about Utako Shimoda's Handwritten Diary. This report introduces diaries from the latter part of 1891 (Material of Utako Shimoda No. 33), written from July to December.

It makes a survey of Shimoda's movements from the diaries and explains about some important events.

The style of the document is the same as the diaries written in 1888 to June of 1891 investigated in previous reports. The record ends on 18th December because she was busy.

From July of 1891, Shimoda recorded works in the school and daily communications such as consultation with two of her students about marriage.

As a remarkable event, a huge earthquake occurred on 28th October, the so-called Nobi Great Earthquake, whose seismic center was in Nishineo-mura, Motosu-gun, Gifu. It was the largest scale of inland earthquake in Japanese history and caused severe damage.

Hearing the news of the earthquake, Shimoda made bandages with her students and went to a charity meeting for the earthquake held in Rokumei-kan. Investigation of Shimoda's diaries and other materials reveals relief operations made by Shimoda and people in the Peer Women's School .